

藤並の森

Vol.85

リレー随筆

「令和」への想い

「平成」から新元号「令和」に改元された。

典拠は現存する日本最古の歌集『万葉集』。日本で記された国書に由来する元号は初めてとなる。

典拠となつた箇所は、『万葉集』卷五の「梅花の歌三十二首」の序文に見える「于時初春令月、氣淑風和」（時に初春の令月にして、氣淑く風和ぐ）——折しも、初春のよい月で、氣は良く風は穏やかである——である。

この序文が、四世紀の中国の書家王羲之の「蘭亭集序」にならつたものであることは、はやく江戸時代の学僧契沖が指摘し、定説となつていて。土佐藩の学者鹿持雅澄の『万葉集古義』にも、「此序は、王羲之が蘭亭記をまねびて……と、その影響を認めている。「是日也、天朗氣清、惠風和暢」（是の日や、天朗らかに氣清く、惠風和暢せり）とある。

◆「寛永版本万葉集」卷五

梅花歌三十二首序

天平二年正月十三日萃于師老之宅申宴會也于時初春令月氣淑風和海波鏡前之粉蘭蕙瓈後之香加以曙嶺移雲松掛羅勿傾蓋夕

箇所が特に関係する。

さらに、万葉びとが教養書として学んだ

田賦」の「於是、仲春令月、時和氣清」（是に於て、仲春令月、時和し氣清し）との関係も指摘されている。

どちらに拠つたかということではない。梅花の歌の序文作者はこれらの他にも多くの詩文を暗記しており、自家薬籠のものとして、序文をしたためたと考えるべきである。

万葉の時代には、唐代はじめの学者李善が注を加えた『文選』を読んでいた。その注には、「帰田賦」の当該箇所「令月」について「令月、吉日。鄭玄曰「令ハ善ナリ」と、後漢の訓詁学者鄭玄の説をあげている。「令」は「善」の意であり、「令月」はよい月である。その「令」と「氣淑風和」の「和」をとつて「令和」とした。よい元号といえる。

私はこの序文から元号が選ばれたことを、別の意味で喜ばしく思う。それは、梅花の歌三十二首の詠まれた宴は、妻の死などさまざまな悲苦を経た歌人大伴旅人が、新たに楽しく生きることを求めて催した宴だったからである。

しかも、その文雅の営みは、都を離れた大宰府という地で催され、三十二首を含む大宰府での歌々は「大宰府万葉」として花

開いた。僻遠の地であることが、かえって豊かな詩想を育んでいる。

鹿持雅澄は三都に遊学できなかつたから『古義』を完成させることができた。高知の文学も、地方であるからこそ到達できる独自の高みに花開くことに意義がある。宮尾登美子も坂東真砂子もそうであった。

平成の時代に起きたさまざまな悲苦を乗り越えて、楽しい時代、善く和する新たな時代に「令和」の世がなることを切に願う次第である。

（奈良女子大学名誉教授 高岡市万葉歴史館長）

「令和」記念展示
新元号「令和」の語源となつたのは、『万葉集』卷五に掲載されている「梅花の歌三十二首」の序文「于時初春令月、氣淑風和」（時に初春の令月にして、氣淑く風和ぐ）の部分。この序文が中国の書家、王羲之の「蘭亭集序」にならつたものではないかということは江戸時代の学僧、契沖が指摘し、鹿持も『万葉集古義』での影響を認めている。

▲現在常設展の鹿持雅澄コーナーにて「令」「和」に関する記述を展示

坂本信幸



高知100年文学展

～大正、昭和、平成の記憶～

平成
31年
（2019年）

4月13日(土)～6月23日(日)

会期中
無休

午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）

平成から令和へと変わる時代の区切りを迎える、世の中もお祝いのムードで満たされている今年。当館では、この区切りの年に、高知の100年の文学を振り返る企画展を開催しています。

展示は、「心の記憶」「場所の記憶」「時の記憶」の3つによって構成されています。

まずは、「心の記憶」のコーナーです。

高知の食のコーナーでは、食べ物を描いた作品を、美味しそうな写真とともに紹介しています。例えば、「ヤマモモ」のコーナーを見ると、高知の作家が甘酸っぱいヤマモモの実をいかに愛しているかということが伝わります。

そして香りを描いた作品を取り上げたコーナーでは、柚子、土佐茶、伽羅など、素敵な香りを楽しみながら、文学作品を味わえます。人気のコーナーです。

また、企画展示室内にある「場所の記憶」のコーナーでは、高知県の各地を書いた文学を、素敵な風景写真とともに紹介しています。現在の写真だけではなく、昔の写真なども織り交ぜているので、昔

平成から令和へと変わる時代の区切りを迎える、世の中もお祝いのムードで満たされている今年。当館では、この区切りの年に、高知の100年の文学を振り返る企画展を開催しています。

展示は、「心の記憶」「場所の記憶」「時の記憶」の3つによって構成されています。

まずは、「心の記憶」のコーナーです。

高知の食のコーナーでは、食べ物を描いた作品を、美味しそうな写真とともに紹介しています。例えば、「ヤマモモ」のコーナーを見ると、高知の作家が甘酸っぱいヤマモモの実をいかに愛しているかということが伝わります。

高知の食のコーナーでは、食べ物を描いた作品を、美味しそうな写真とともに紹介しています。例えば、「ヤマモモ」のコーナーを見ると、高知の作家が甘酸っぱいヤマモモの実をいかに愛しているかということが伝わります。

さて、展示会のかなめとなるのが「時の記憶」のコーナーです。ここでは、迫力ある100年分の年表とともに、当時の文学の特徴をご紹介し、それらに関連する文学の資料などをご紹介しています。

芸術至上主義的な大正期の文学から昭和初期の大衆文学の活気、また戦争前後の文学の停滞期から戦後の高度経済成長期、さらに平成に至るまで、文学は大きく様相を変えました。執筆の道具一つとっても、原稿用紙からワープロ、そしてパソコン等へと変化し、それに伴つて文体などもだいぶ変化しています。展示資料も、若い世代の作家の手書き原稿がほとんどないことがわかります。並べられた資料から、それぞれの時代を感じることが出来ますので、是非じっくりご覧ください。

今回初公開の資料も多くあります。特に寺田寅彦の草稿「糸車」や田岡典夫の草稿「虎の口」などは必見です！

（学芸課／川島禎子）



の高知の風景なども楽しむことができます。

展示会のかなめとなるのが「時の記憶」のコーナーです。ここでは、迫力ある100年分の年表とともに、当時の文学の特徴をご紹介し、それらに関連する文学の資料などをご紹介しています。

芸術至上主義的な大正期の文学から昭和初期の大衆文学の活気、また戦争前後の文学の停滞期から戦後の高度経済成長期、さらに平成に至るまで、文学は大きく様相を変えました。執筆の道具一つとっても、原稿用紙からワープロ、そしてパソコン等へと変化し、それに伴つて文体などもだいぶ変化しています。展示資料も、若い世代の作家の手書き原稿がほとんどないことがわかります。並べられた資料から、それぞれの時代を感じることが出来ますので、是非じっくりとご覧ください。

▲展示風景

▲寺田寅彦草稿「糸車」(当館蔵)

▲田岡典夫草稿「虎の口」(当館蔵)



安岡章太郎展

—〈私〉から〈歴史〉へ



▲安岡治子さん 講演会の様子

高知展では、寺田寅彦と安岡章太郎との関係や高知の風物・高知に対する安岡の思いなどをエッセイから抜粋して紹介したり、安岡自身のルーツや両親・親族などを描いた小説などを通して、安岡と高知との関係を検証しました。

観覧者の多くは、展示室内をゆっくり見回す傾向があった」と分析し、「適当に妥協せず、疑問に思うことには、突つかかった」と1963（昭和38）年、小林秀雄らと旧ソ連作家同盟の招きで旧ソ連を訪ねた際、クリミア半島のヤルタで優秀な少年少女を集めたピオネール（共産主義少年団）のキャンプが開かれていたのに対しても「落ちこぼれの子こそ呼んで励ましてやればいいじゃないか」と言い「ご褒美だ」というガイドの説明にも耳を貸さなかつたというエピソードなどを紹介。安岡の土佐人気質的な部分に触れながら「40～50代になり、血が騒いだのか、父は折りに触れて高知に来た。心のふるさとは、土佐だったのでしょうか」と締めくくられました。

治子さんは、前回の当館報「藤並の森」に「本年、1月26日から高知県立文学館で『安岡章太郎展』が開催されたことは、真に喜ばしく感謝している」と書いてくださいっていましたが、初日の1月26日

展覧会報告

「安岡章太郎展—私から歴史へ」が平成31年3月24日（日）に閉幕しました。

今回の展覧会は、作家の黒井千次氏監修、公益財団法人神奈川近代文学館の編集協力により、従来の内容に「安岡章太郎と高知」を追加して開催いたしました。

高知展では、寺田寅彦と安岡章太郎との関係や高知の風物・高知に対する安岡の思いなどをエッセイから抜粋して紹介したり、安岡自身のルーツや両親・親族などを描いた小説などを通して、安岡と高知との関係を検証しました。

とご覧くださつており、男性のお客様を多くお見かけしたのも、今回の展覧会の特徴だたたと思います。

2月10日（日）は、展覧会関連イベントとして、安岡章太郎の長女でロシア文学者・東京大学大学院教授の安岡治子さんに「父の思い出」と題しご講演いただきました。

治子さんは、安岡を「学校嫌いで、劣等生。きつちりと割り切れない、はみ出したものの中にこそ人生の意味があると見いだす傾向があつた」と分析し、「適当に妥協せず、疑問に思うことには、突つかかった」と1963（昭和38）年、小林秀雄らと旧ソ連作家同盟の招きで旧ソ連を訪ねた際、クリミア半島のヤルタで優秀な少年少女を集めたピオネール（共産主義少年団）のキャンプが開かれていたのに対しても「落ちこぼれの子こそ呼んで励ましてやればいいじゃないか」と言い「ご褒美だ」というガイドの説明にも耳を貸さなかつたというエピソードなどを紹介。安岡の土佐人気質的な部分に触れながら「40～50代になり、血が騒いだのか、父は折りに触れて高知に来た。心のふるさとは、土佐だったのでしょうか」と締めくくられました。

最後になりましたが、安岡光子様、安岡治子様を始め、ご協力賜りました関係者の皆様方に、心より御礼申し上げます。

（学芸課長／津田加須子）



▲海辺の杜ホスピタルから浦戸湾を望む

は、安岡章太郎の6年目の命日であり、治子さんのお誕生日でもありました。「高知は40年ぶり」という治子さんのユーモアを交えた講演は聴衆の心を捉え、受講者は熱心に耳を傾けていました。

また、香南市山北の安岡家住宅（重要文化財）や『海辺の光景』の舞台となつた浦戸湾に建つ「海辺の杜ホスピタル」などを巡るバスツアーーや高知市内の安岡章太郎ゆかりの地を訪ねる文学散歩など

の催しも好評でした。

常設展の中のがね

シリーズで変わる
常設展をご紹介！

常設展示を入れ替えました！

【近現代の詩歌コーナー】
若尾瀧水から岡本弥太へ

岡本弥太（本名・亀弥太）は、1899年に香美郡岸本村（現・香南市香我美町）に生まれ、人生の深奥に迫る深い思索と、緊張感のある格調の高い詩を書きました。

弥太は、20歳の時に神戸市の鈴木商店に就職します。この頃、同窓で灘で同宿した「白哲俊才の哲学的文学青年」であったという近森豊馬（筆名・夜木虹太郎）の影響を受け、詩を書き始めます。

鈴木商店を辞した後、帰郷し、43歳で亡くなるまで詩作を続けます。1923（大正12）年からは数多くの同人詩誌を発行し始めるなど、活動は高知県内にとどまらず、大阪や東京などの同人にも参加するなど、中央詩誌への作品発表にも力を注ぎました。

また、小学校訓導や代用教員を経、1939（昭和14）年第五尋常小学校（現・香美市香北町）の校長となります。当時の生活は裕福ではありませんでしたが、弥太は家族に深い愛情を注

ぎました。友人への手紙には、娘たちと貝拾いや漁に行く様子が書かれており、家族思いの優しい父親像が見えてきます。家族に寄せた詩も多く、今回紹介している「うすぶとん」は家族に、「荒磯詩篇」（原稿／2枚目のみ）は早世した二女・玲に寄せた詩です。

高知県内・外の詩人と交流も多く、なかでも詩人・間野捷魯は、「蠶」「個体」などの同人詩誌を通じて弥太と親交を深めました。

弥太の生前唯一の詩集『瀧』は、出版実務面での間野の無償の協力のもと実現されたものであり、弥太の詩人としての活動を支えた重要な人物の一人であったといえます。

展示では、岡本弥太の詩集『岡本弥太詩集－山河篇－』『琴歌抄』をはじめ、草稿や家族、友人に宛てた書簡、徳利や英和辞書など愛用の品々をご紹介しています。「この世に苦悶する者を、やさしく愛撫してくれる詩集」（杉江重英）、「どうどうと押切つてくる瀧の重量は、人々の胸に氾濫し、混沌たる詩壇の汚物をも洗い流してくれるだろう」（瀧川富士夫）などと激賞された詩集『瀧』や、弥太の素直さが表れた詩の数々が収載され、国内詩壇で高い評価を受けた『琴歌抄』にも、ぜひご注目ください。

岡本弥太は今年生誕120年を迎えます。家族や多くの仲間に囲まれて生涯を送り、詩の世界に生き続けた岡本弥太は、死後も、詩人とその作品を知る人々の間で深い印象を刻んでいます。瀧のような力強さと繊細さを併せ持つ詩の世界と彼の生涯をご覧いただければと思います。

（学芸課／野々村昭美）

常設展企画コーナーのご案内

文学者のメモリアルイヤーなど、折々に多彩なテーマで展示する常設展の企画コー

ナー。今年度は、「猪野睦追悼展－日常のなかで」と題して、2018（平成30）年8月3日に逝去された高知の詩人・猪野睦さんの追悼展を開催しています。

猪野さんは1931（昭和6）年生まれ。戦後まもなく誕生した詩誌「蘇鉄」「日本未来派」（ともに1947年創刊）の同人として活躍し、自らも「塩岩」「花粉帶」などの詩誌を創設。日常雑景を描いた優しい詩や戦争に関する重厚な詩を書き、2冊の詩集『沈黙の骨』（1962年）、『ノモンハン桜』（2003年）を刊行しています。

文学研究者としても活躍し、郷土の文学遺産を後世につなぐため、歴史の片隅に消えゆく文学者を掘りおこし、同時に2冊の評論集を刊行。その他、豊富な知識で当館をはじめとする高知の文学団体の活動を支え続けてくれました。

今回の追悼展では、愛用品、

研究ノート、賞状、未発表エッセイや写真などを展示し、猪野さんの詩の魅力と文学研究への取り組みをご紹介しています。



猪野さんの文学研究の全貌はまだ明らかになっていませんが、季節ごとに詩を入れ替えて、探究を進めています。

2020年3月22日（日）までの展示ですので、ぜひご覧ください。（学芸課／福富陽子）

猪野さんの文学研究の全貌はまだ明らかになっていませんが、季節ごとに詩を入れ替えて、探究を進めています。

猪野さんの文学研究の全貌はまだ明らかになっていませんが、季節ごとに詩を入れ替えて、探究を進めています。

土佐の文学さんぽ 83

文芸評論の先駆者——田岡嶺雲

高橋 正

▲高知市赤石町の児童公園にある生誕地碑

甲藤譲宛 寺田寅彦はがき
1910(明治43)年1月1日
甲藤幸哉氏寄贈



そこまで細かに其性情をうつし来る。

豈に是れ神助の文にはあらずや、入泉鏡花らの才を誰よりも早く認め、神の筆にはあらずや」と絶賛した。

高く評価した。

「下流の細民と文士」では、都市細民の「悲惨の運命」に「満腔の同情」を注ぎ、「渾身の熱血」をもつて、「彼等憫れむべき生涯」を描く作家の出現を熱望した。

その典型が出た。一葉の「にごりえ」である。嶺雲は「吾人一葉女史

(直木賞作家)は、「一葉さんをお嫁さんにしたら……」と家族の話題になつたというエピソードを、「嶺雲と私」に懐かしげに記している。

嶺雲は「にごりえ」のヒロインお力の売春は、「境遇の罪なり、人の罪にあらざるなり」と断定。それはが『濁江』一篇を読みて深く作者の犀利的眼光と溢るるが如き同情とにつぶす。『濁江』一篇は売春の女を中心とした人公としたもの、作者はこの厭惡すべき女性に向つて、無限の同情を

人発掘の名伯楽であつた。樋口一葉、泉鏡花らの才を誰よりも早く認め、神の筆にはあらずや」と絶賛した。

まるで恋文である。甥の田岡典夫(直木賞作家)は、「一葉さんをお嫁さんにしたら……」と家族の話題になつたというエピソードを、「嶺雲と私」に懐かしげに記している。

(6) (高知新聞 昭和57年9月) さて、今回ご紹介する絵葉書の受取人である甲藤譲氏(幸哉氏の父)は、寅彦の妻の姉の子であり、寅彦の甥にあたります。葉書の消印には「NAPOLI」とあり、寅彦が欧州留学中に立ち寄つたイタリアから出されたことがわかります。

寅彦は一九〇九年の年末、冬期休暇を利用してオーストリアからイタリアへ旅をしました。大晦日はポツツオーリの近くにある噴火口に行き、案内者のチップの要求に閉口しながら見学、その後はカフエで賃金をつかまされるなど散々な年越しであったようです。

新年はヴェスヴィオ火山を登り、夜には年賀状を書いたりしてますので、もしかしたらこの中の一枚が甲藤氏の元へ届いた葉書かもしれません。

資料受贈報告

寄贈資料から

甲藤譲宛 寺田寅彦はがき
1910(明治43)年1月1日
甲藤幸哉氏寄贈



受贈報告(平成31年2月~4月)敬称略

▼有川ひる・「県庁おもてなし課」執筆資料 他

▼中村牧子・「大町桂月書軸」他

▼松本ゆり子・「高野素十短冊」他

▼島岡 晨・「みらいらん 3号」池田 康編 洪水企画刊

▼中脇初枝・「神の島のこどもたち 中脇初枝著 講談社刊」

▼論創社・「樂園事件 森下雨村翻訳セレクション」

▼論創社外ミスティリ 230 森下雨村訳 J.S. フレッヂャー著

▼四宮義正・「寺田寅彦の光跡を求めて 四宮義正著刊」

▼見元ゆり・「続・晩冬の記 中村さだか著刊」

▼宮地たえこ・「横山風のこえ 宮地たえこ著刊」

▼山本 衛・「詩集 上山郷今昔 山本衛著 ON L刊」

▼原田英祐・「土佐日記・歴史と地理探訪(付・地誌、日記) 東洋町資料集・第6集 原田英祐著刊」

▼河出書房新社・「美しき瞬間 The Essence of Toshiko Okanoue 岡上淑子著 河出書房新社刊」

カルサポ事業について

2019年4月1日現在、当館には70名のカルチャーサポーターが在籍し、様々なボランティア活動を通じてそれぞれの持ち味を發揮し、館の運営を支えてくださっています。

活動は、「文学散歩」「資料整理」「イベント補助」「朗読」「紙芝居普及活動」「読み聞かせ」「草の根広報」の7分野に分かれています。例えば、企画展の関連イベント「文学散歩」でのガイド役、資料の保存作業、イベント当日の受付、年間を通じての朗読の会、館内外での紙芝居公演や絵本の読み聞かせ、また、地域に根差した広報活動など、多岐に渡っています。

中でも、新しい分野へのチャレンジとして、昨年より新たに「読み聞かせ」活動も始めました。これは、保育園や幼稚園、小学校を中心に子どもたちへの読み聞かせが活発になってることを受けて、当館でも取り組みを開始したものです。

これからも、カルチャーサポーターの皆さんとともに魅力ある活動を目指していきますので、あたたかく見守っていただけたらと思います。

▲毎月第1土曜日に開催される「おはなしキャラバン」ある日の風景

（学芸課／道脇夕加）

**みんな大好き！
はたらくのりもの
だいしゃうこ!!**
～えほんのせかいへしゃっぱつしあわせ～

巨大段ボールショベルカーが登場!
運転席に乗って、記念撮影をしよう!

令和元年 7月13日(土)→9月8日(日)開催!!

今年の夏ははたらくのりもの絵本が
だいしゅうこう!

50年以上前に出版され、いまなお

愛されている『しょうぼうじどうしゃ
じぶた』(福音館書店)やダンブやショ

ベルカーが大活躍の『こうじのくる
ま』(WAVE出版)、『おたすけこび

と』(徳間書店)、新幹線好きにはた

まらない『新幹線のたびはやぶさ・
のぞみ・さくらで日本縦断』(講談

社)など、みんなが大好きな乗り物
絵本の世界を大型パネルや体験型展

示でご紹介します。

『おたすけこびと』コーナーでは、
おたすけこびとたちと一緒にケーキ
のかざりつけを楽しんだり、『おはよ
う！しゅうしゅうしや』『はしれ！た
くはいびん』『ピン・ポン・バス』(ど
もに偕成社)のコーナーには信号機

や横断歩道、バス停など、絵本をイメージした町中が登場!その他の

にもハンドルをまわしたり、ドアを開けたり:子どもたちが絵本の
世界に入った気分で楽しめる、触って遊べるしかけをいっぱいご用
意してお待ちしています。

また、『おたすけこびと』の挿絵画家・コヨセジュンジさんによる
ワークショップや『新幹線のたびはやぶさ・のぞみ・さくらで日
本縦断』のコマヤスカンさんによるトークショーやサイン会など
絵本作家にじかに会えるイベントも開催します。夏休みの思い出に、
ぜひご家族、ご友人でお越しください。

(学芸課／岡本美和)

学芸課整理班 山崎 真理
文学の面白さをたくさん的人に知って頂けるよう頑張つていただきたいと思います。
宜しくお願ひ致します。

総務事業課 高橋 敏江
文学館のゆつたりとした空間・
時間の中、作家の言葉や想い
にふれ、まだまだ知らないことをばかりだと感じる日々です。
とにかくだと感じます。

総務事業課 山崎 幸乃
文学館に勤めて、まず、顕彰作家の多さに驚きました。
いろんな文学に改めて触れ
てみようと思います。

新職員からのコメント



(総務事業課／大原良子)

ショッピングより

汗ばむ陽気や木々の青さの中に夏の訪れを予感する季節となりました。令和という新しい時代を迎える藤並の森など、見慣れた景色も新鮮に感じるような気持ちがします。

企画展で高知の100年の文学を振り返ると同時に、昭和・平成という時代を感じて頂けるよう、ミュージアムショップでも様々な商品をご用意しています。各時代のベストセラー小説、懐かしい昭和のお店のジオラマを手作りできるキット、柚子や文旦、ひのきといつた高知ならではの香りのアロマグッズなど。

お勧めは自分の半生を振り返ることのできる『自分史』関連の書籍です。

自分史というと難しく感じられるかもしれませんが、年ごとのイベントを振り返ったり、写真を見返したりしながら、ご家族と一緒に思い出を語る時間を持たれてはいかがでしょうか。きっとご家族のことをさらに深く知ることの出来る豊かな時間となることでしょう。

(総務事業課／大原良子)

「権」をはじめとした自伝4部作が秀逸と思われるが、土佐の芸妓の世界に生きた4人の女性を描いた「寒椿」という作品がある。時代や苛酷な運命に翻弄されながらも凜々しく激しく美しく生き抜く女性達を作者は、「大雪にうずもれて咲く寒椿」と語っている。

何時の時代でも、「花」によせる作者の感性が光っている。(岡崎順子)

花々が咲き誇り、

汗ばむ陽気や木々の青さの中に夏の訪れを予感する季節となりました。

令和という新しい時代を迎える藤並の森など、見慣れた景色も新鮮に感じるような気持ちがします。

花鳥風月という言葉がある。天地自然の美しい風景を指すものだが、古来より様々な文学がこれらをテーマに描かれて来ている。

「花」に関して、いくつか例を挙げると、まず今話題の「令和」。

すでにご承知のとおり典拠は万葉集。ある宴において、梅に関する和歌32首の序文として読まれたものに由来する。ここでは、梅の開花とともに、厳しい冬が終わり明るく暖かな春の訪れを喜ぶ人々の姿を思い浮かべることが出来る。古代は春を呼ぶ花といえば梅だったのだろう。

一方で時間の経過とともに、春の花の主役は桜に移るようだ。

平安時代、西行法師は「願わくは花の下にて春死なむその如月の望月のころ」と綴った。自分の生涯の最期を満開の桜のもとで迎えたいという切なる願いは、されませんが、年ごとのイベントを振り返ったり、写真を見返したりしながら、ご家族と一緒に思い出を語る時間を持たれてはいかがでしょうか。きっとご家族のことをさらに深く知ることの出来る豊かな時間となることでしょう。

現代でも春の花といえば桜。その淡く薄い色合いと散り際の花吹雪は、私たちの感性に春を告げる。さて、当館では宮尾文学の世界の展示替えを行った。

平成31年度も、全回出席された方にはマイスター認定書や館報への原稿掲載などの特典をご用意しています！

参加ご希望の方は「高知県立文学館 平成31年度 文学マイスター講座係」までお申し込みください。



館長室から



平成30年度

文学マイスター講座受講生から

「平成30年度 文学マイスター講座」の寺田寅彦マイスター認定者による受講の感想文です。

皆さん、寺田寅彦について各回熱心に学ばれていました。

寺田寅彦マイスター講座 山本典判

マイスター講座を受講して 吉本さゆみ

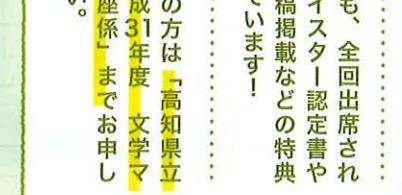
その日は円満橋を北に、日中不

再戦、間島パルチザン、戦死せる教え児よ、鯨去る行方、最後の「花物語」の碑から寅彦邸に入ると運よく伊東さんと山本健吉先生にお話を伺えました。寺田寅彦マイス

ター講座はその予備知識で博士の多岐に亘る分野に興味津々、先生方の話を聴き逃してはと最優先の土曜日。楽しい一日でした。「天災は忘れられたる頃来る」何度も意味深いですが、「忘れられたる頃来る」のは天災ばかりではない様な…昨今…マイスターの証書を戴きましたので、寅彦先生に習って何事も注意深く観察して行きたいと思います。

この講義で出会った、戦国時代が全盛期といわれる連歌に幽玄の世界が開かれてくるのを覚える。

明治という時代は人も花も果物も飲み物もきっと美しく、美味しかつただろう。心美しい美男美女がいて(今は少い)、食べ物も今まで段美味かつたに違いない。寅彦先生は贅沢にもその不思議さ、自然の喜びを享受されていたのだ。



▲講義風景



▲ワークショップの様子

企画展案内

高知県立文学館 カレンダー

高知100年文学展

～大正、昭和、平成の記憶～

会期 平成31年4月13日(土)～令和元年6月23日(日)

午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

場所 高知県立文学館
2階企画展示室

会期中
無休

観覧料 400円(常設展含む) 高校生以下無料 20名以上の団体は2割引

風景写真や香り、音など五感を刺激する装置を活用しながら、大正末から平成まで100年の高知の文学を振り返る企画展です。懐かしい記憶と文学が交差するこの企画展で、時代を映し出す高知の文学をお楽しみください。



次回
企画展
予告

みんな大いすき! はたらくのりもの だいしゃうごう!! ～えほんのせかいへしゃっぱつしんこう～

会期 令和元年7月13日(土)～令和元年9月8日(日)

午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

場所 高知県立文学館 2階企画展示室

観覧料 500円(常設展含む) 高校生以下無料

今年の夏は、はたらく乗り物絵本が大集合! 子どもたちが大好きな乗り物絵本を通して、物語の世界を、心と体いっぱいに楽しむことのできる展覧会です。お楽しみに!

はたらくのりものオリジナルTシャツをつくろう!

だいすきな乗り物を描いて、世界に一つだけのTシャツをつくるイベントです。

開催日時 7月15日(月・祝)

場所 文学館1階ホール

7月31日(水)

参加費 材料費(キッズサイズ400円・大人サイズ500円)と

8月14日(水)

当日観覧券

時間①9:00～②13:30～

定員 各回40名※先着順

つくってあそぼう!はたらくのりもの工作イベント

開催日時 7月28日(日)「新幹線」 定員 各日50名 事前申込

7月29日(月)「工事車両」

参加費 当日観覧券※工作に使用するため500mlの

8月21日(水)「緊急車両」

紙パックをご持参ください

14:00～(1時間くらい)

内容 各日「緊急車両」「新幹線」「工事車両」に

場所 文学館1階ホール

わけて制作します。

紙パックや空き箱を使って、みんなの大好きなはたらくのりもののおもちゃをつくります。

「おたすけこびと」コヨセジュンジさんワークショップ&サイン会

開催日時 7月21日(日)14:00～

定員 3、4歳以上 30名

場所 文学館1階ホール

ワークショップ終了後、当館ショップで

参加費 当日観覧券 事前申込

『おたすけこびと』シリーズをご購入のお客様対象のサイン会を開催します!

これからの企画展案内

言葉のチカラ、声の魔法展

2019年9月21日(土)
～11月17日(日)

観覧料 500円
(常設展含)



馬場孤蝶 生誕150年記念展

2019年11月30日(土)
～2020年1月19日(日)
(※12月27日～1月1日は年末年始のため休館)



観覧料 400円

(常設展含)

ヒグチユウコ展 CIRCUS

2020年2月1日(土)
～3月29日(日)

観覧料 500円
(常設展含)



イベント情報

文学マイスター講座

●第3回(令和元年6月22日)

演題「岡本弥太とその眼差し」

講師 佐藤元紀先生

(高知高等専門学校講師)

参加無料・事前に申し込みが必要です。

利用案内

開館時間 午前9時～午後5時(入館は、午後4時半まで)

休館日 年末年始(12月27日～1月1日)を除き、無休。

※その他メンテナンス等で臨時休館することもあります。

観覧料 一般360円 企画展はそれぞれ異なります。

20人以上の団体は2割引。高校生以下無料。

高知県・高知市長寿手帳、身体障害者手帳、療育手帳、

精神障害者保健福祉手帳、戦傷病手帳又は被爆者

健康手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料です。

駐車場 なし。ただし近辺に有料駐車場があります。

附帯設備 ホール、ミュージアムショップ、子どものぶんがく室、

茶室「慶雲庵」

貸出施設 企画展示室、ホール、茶室

交通のご案内



- 高知龍馬空港より空港連絡バス<県前前行>
「高知城前」下車、北へ徒歩5分または
<高知駅前>「北はりまや橋」下車、徒歩20分
- JR高知駅下車、徒歩20分(または連絡バス・路面電車を利用)
- 路面電車「高知城前」下車、北へ徒歩5分
- バス停「高知城前」下車、北へ徒歩5分

〒780-0850
高知市丸ノ内1丁目1-20
電話 088-822-0231
FAX 088-871-7857

